

説教 『敵を愛せ、隣人なのだから』山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 53：11～12／マタイによる福音書 5：43～48

戦争とは何であろうか。いったい誰と誰が戦うのであろうか。70年安保も過ぎた高校一年生の頃、駅で国士館高校と朝鮮高校との集団乱闘に遭遇し、その狂乱ぶりに戦慄した。中高校生も教師も長髪で「peace」が挨拶言葉だった時代、愛国スローガンで暴れる若者もいた。戦争は、収奪し合う金と力の不均衡から起こるのだろうが、それを実行させるのは暴力高校生とさして変わらない世の妄想。

イエスは弟子たちに語った。「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか(マタイ 5:46)」。また異邦人のような内向き平和でもダメだ(5:47)と言う。では、どうであれと言うのか。「わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい(5:44)。「敵を憎め(5:43)」という律法からのなんという飛躍であろうか。

イエスは「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である(ヨハネ 15:12)」と語っている。このように仲間同士で愛し合えというのなら、律法でもあり(レビ 19:18)、納得もできよう。だが「敵を愛せ(マタイ 5:44)」とは、どういう愛の跳躍なのか。平和をめざす者の理念を語っているのか。あるいは、いかにもイエスらしい、角度をつけた物言いなのだろうか。

イエスは現実と乖離した観念を語ることはない。また論争で言い負かして溜飲を下げることもない。戒めは具体的であり、額面通り「敵を愛せ」という意味であろう。それでは敵とは誰なのか。「自分を愛するように隣人を愛しなさい(レビ 19:18)」という律法。イエスは律法の「愛」を広げたというより、「隣人」の領域をととても広く見ていた。すなわち、味方をはるかに超えて、敵までもが隣人なのだ。

世論は「敵を愛せなど無茶苦茶だ」と言うだろう。悪への応報があつてこそ社会正義が成り立つと考えるからだ。国家の裁判でさえ被害者(家族)感情が考慮される。とはいっても実際のところ、敵を赦し、親愛感情を持つことは難しい。ただ私たちが、敵を愛そうという決意を持ち続けるなら、やがて敵は、敵である足場を失うだろう。些細な日常の出来事からも、それは想像できるはずだ。

「敵」もまた「隣人」。隣人は仲間という狭い範囲に留まらない。出会っている「その人」が隣人。気が合わず、ウマが合わず、見解が衝突し、敵愾心があったとしても、そこで出会っているなら、彼は私の隣人なのだ。教会で出会う隣人と、戦場で遭遇する隣人とは事情が違ふかもしれない。だがかつて欧州の戦場で、兵士たちは降誕節に、「きよしこの夜」を共に歌う隣人に出会っている。

「隣人愛」は憎悪の連鎖を断つ。そのためにイエス御自身は憎しみのただ中に身を置かれた。「彼は苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った(イザヤ 53:11)」。つまり十字架。十字架は私たちの内にも建てられている。「十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされた(エフェソ 2:16)」。ゆえに「実に、キリストはわたしたちの平和(2:14)」なのだ。十字架は、憎悪の連鎖を滅ぼす神の痛み。

「多くの人々の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった(イザヤ 53:12)」。私たちはこの人、キリストの内にいる。こんな愛に捉えられているのだから、やがて敵意は消滅する。



【おまけのひとこと】

敵を愛せという戒め 敵と出会う必要があろう 兄弟姉妹で平和を祈っているだけではない
扉を開け 町へ行き 出会うまで敵を捜せ 憎んでしまったらと恐れるな キリストが愛するのだから